

平成22年度企画展

久場島清輝展

— 近世～近代に石垣島で活躍した絵師 久場島清輝の世界 —



- ◆期 間：平成22年6月24日～7月4日
(6/28 月曜日は休館)
- ◆時 間：9:00～17:00(入館は16:30まで)
- ◆場 所：石垣市立八重山博物館特別陳列室

石垣市立八重山博物館

久場島清輝とその作品について

久場島清輝は慶応2（1866）年、那覇生まれ。明治25（1892）年頃、沖縄芝居の巡業で石垣島に来島後、宮良に定住し、大正9（1920）年に55歳で亡くなるまで宮良を拠点に活躍した画家・芸家でした。『宮良村誌』によると、清輝の父・清心は具志家の三男。絵画に優れた人物でその作品が国王への献上品となり、恩賞として久場島を与えられたといわれます。久場島が慶良間諸島中、あるいは尖閣諸島中のものかは不明ですが、いずれにせよ清心は島の名前だけを貰い、「久場島」姓を名乗ることになったようです。

八重山に渡ってくる以前の清輝については、幼少の頃より芸事に秀で特に絵や踊りに優れていたと子孫に伝わるのみで詳しい履歴は不明ですが、画人である父・清心のもと、幼少の頃より画技を磨き、また土族の嗜みである歌舞音曲を身につけていったと思われます。

26歳頃、宮良に定住した清輝は、各村々をまわり舞踊を教えるとともに、所望された家の床間に飾る掛軸の絵や、村々の葬具の仏画等を描いたといわれます。現在、清輝の作品として確認されているのは①「彌勒と唐子図」、②「花鳥図」、③「琉装旅女の図」、④「樹下織婦理系図」、⑤「大浜村龕幕の仏画」、⑥「画稿（約130点）」です。

③「琉装旅女の図」は明治30～37（1897～1904）年宮良村頭を務め、宮良分教場新築に尽力した豊川善佐が分教場の児童等から記念に贈られたもの。①・②・③・⑤の下絵は⑥の画稿に含まれていて、清輝はそれらの下絵をもとに絵を描き、彩色して作品を仕上げたことが分かります。また、③・④と同じ構図の絵は沖縄県立博物館・美術館にもあり、その2点の下絵は清輝が八重山に渡って来る以前に、原画もしくは複製画から模写したと考えられます。

⑥の画稿の内容は、山水画、花鳥画、神仙画、動物画、風俗画、絵文字等、多岐にわたります。和紙を数枚張り合わせて全体を大きく描いた下絵や、1枚の和紙に部分のみが描かれた下絵等、大小様々なバリエーションが見られます。そのうちの「十王図」（5点）は、八重山の古刹、桃林寺が所蔵する十王図（10点）の1点を清輝が補修した際に描き写したものと伝えられています。清輝が補修したのは1点のみですが、模写した十王図は5点。限られた時間のなか、画人として出来るだけ多くの絵を描き写すことが、自らのコレクションを増やすという実利的な側面とともに、清輝にとっては画技を磨く機会と捉えていたのかも知れません。

画稿中、花鳥画や恵比須図等の12点は、新たに江戸中期に大阪で活躍した画家・大岡春朴が寛延3（1750）年に著した、古今東西の名画をあつめた複製画集『和漢名画苑』からの模写だと分かりました。今後、清輝が残した画稿や作品を丹念に調べ、もともなった原画の存在やその系譜、清輝と同時代に沖縄で活躍した絵師との関係等、清輝の画業を総合的に評価するための作業をすすめていく必要があります。

（学芸員 寄川 和彦）

描く

久場島清輝の作画方法のひとつに、先にも紹介した「写し」があります。彼はオリジナルの作品を描いたというよりも、他の人の作品などをなぞったり模写したりして下図を作り、それを利用して新たに構成を決めながら下絵を描き、着色して絵を完成させていきました。実際に、写した年月日を絵に記したものが残されています。図1の虎図の部分を拡大したのが図2です。一部読めない部分もありますが、「明治四拾壹年旧■二月四日寫 久場島■輝」の文字が確認できます。

さらに、このように1枚の絵の全体を写すだけでなく、部分を写して、それをさらに組み立てていく方法も利用しています。現存する資料から、彼の作業を見てみましょう(図3)。Aとした花鳥図は下絵の段階、Bとした花鳥図は彩色され完成されたものです。①~③としたものは、それぞれ1枚ものとして存在する下図ですが、おそらくもともとは別の絵の一部であると考えられます。つまり、大きな絵の一部を切り取ってなぞり、パーツごとの絵を作成し、それをさらに組み合わせて1つの絵を構成していることが分かります。久場島は描くだけでなく紙面構成を考える編集デザイナーの才能もあったようです。



図1 虎図

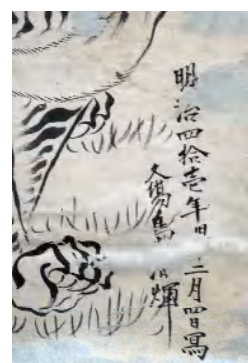
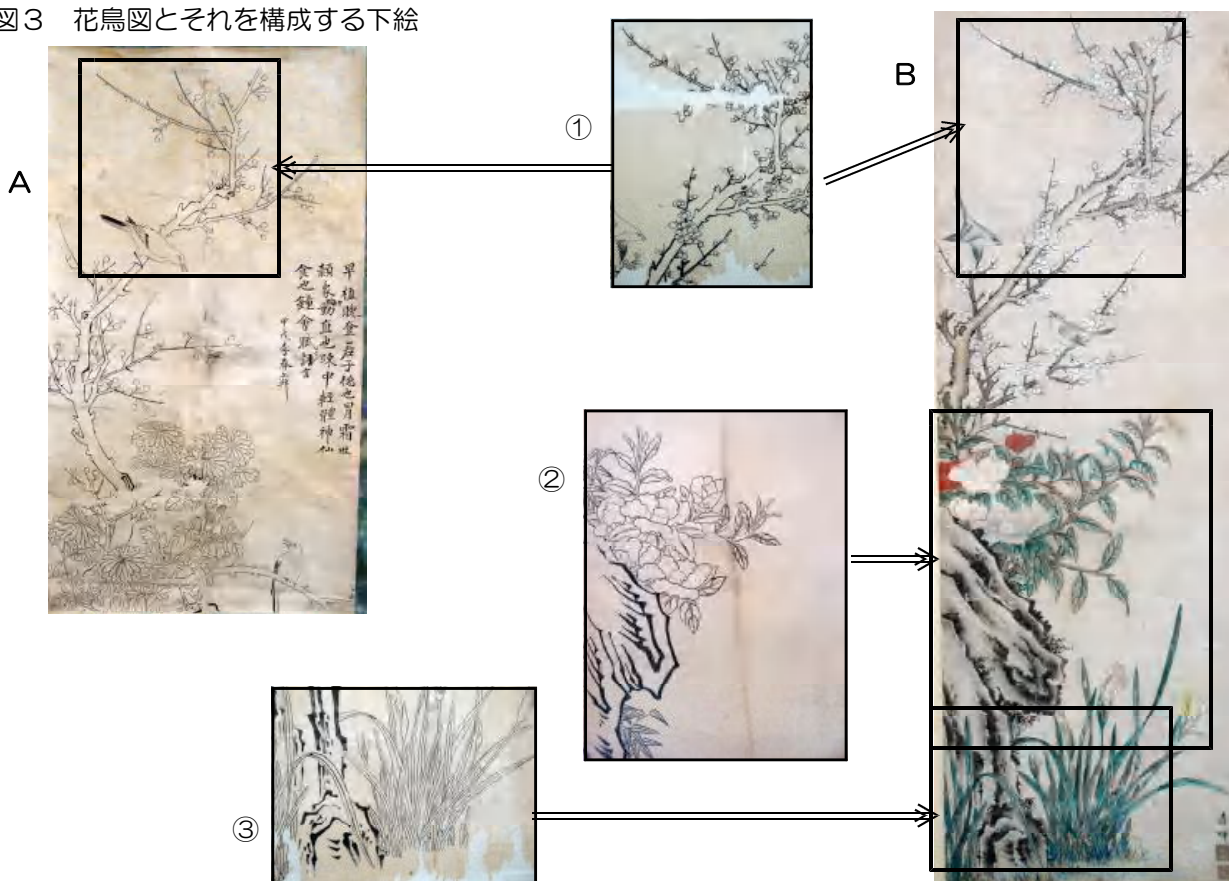


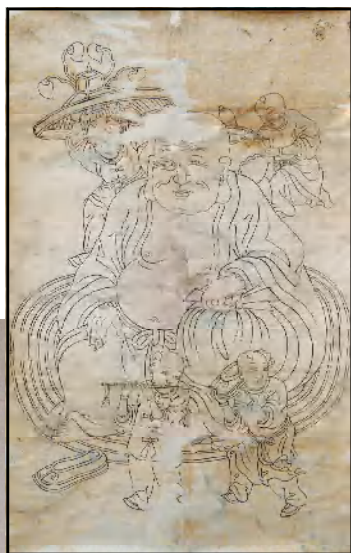
図2 虎図の一部

図3 花鳥図とそれを構成する下絵



仕上げる

久場島は生涯を通して多くの下図を描き続けたそうです。先に様々なパーツを構成して描いたようだと紹介しましたが、彩色され仕上げられた絵には奥行きがあり、作品として完成しています。先に紹介した花鳥図以外にも、彩色された絵が残されています。絵とそれぞれの下絵を並べてみると、久場島の絵師としての才能が見えてきます。



久場島はいわゆる蔵元絵師とは異なり、庶民派の絵師でした。人びとに望まれると、その好みにあった様々な絵を描いていたものと思われます。残された下絵からは、ひとつの原画から組み合わせにより多くの絵（構図）を生み出していたことがうかがい知れます。しかしながら、完成された絵はほとんど確認されていません。この展示会を気に、皆さまの家に眠る資料の中から、新しい発見があることを願っています。